

庭劇団ペニノ  
タニノクロウ

地獄谷温泉  
無明ノ宿

2018年上演バージョン

庭劇団ペニノ

# 地獄谷温泉 無明ノ宿

脚本

タニノクロウ

出演

倉田百福・八十二歳 マメ山田

倉田一郎・五十五歳 辻孝彦

松尾・三十五歳 森準人

滝子・八十一歳 石川佳代

文枝・五十三歳 久保亜津子

いく・三十八歳 日高ボブ美

三助・四十七歳 飯田一期

老婆の声 田村律子

舞台

古い湯治宿。

舞台は全部で四面、それが一つの回転舞台の上に乗っている。

一面目：玄関・便所

二面目：客間（一階は男部屋、二階は女部屋）

三面目：脱衣場

四面目：湯殿（露天岩風呂）

この四面の真ん中は中庭となっている。  
中庭には柿の木が立っている。

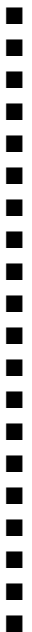


わたしの故郷である富山県に。

宇奈月温泉と八尾の町に。

北陸新幹線の開業により消失した多くの生命に。

その戦いに。



老婆の声（以下「声」と表記）「日本全国に「地獄谷」と名の付く場所がありま  
す。その多くは豊かな地熱から湧く温泉が名前の由来です。ここは北陸に  
ある「地獄谷」と呼ばれる温泉地、その湯量豊富な温泉に加えて、二百年  
ほど前に噴火した火山が作った切り立つ閃緑岩の岩壁が、地獄の風景と似  
ているとされ名付けられた場所です。さて…」

柱時計の時報音とともに明転する。

針は二時を示している。

声「ここは、その温泉地の中心から二里ほど山深く入った場所にある名も無い  
名の無い湯治宿。その親子はこの宿に、ある仕事を依頼され、東京からや  
ってきました。秋が冬支度を早め、氷点をすこしばかり下った寒い日でし  
た。到着したのは午後、二時を三分回ったとき…」

### 1場 玄関（午後二時、晴れ）

この湯治宿の玄関口から玄関ホール。

貫禄ある佇まいの古い木造建築。豪雪地帯の厳しい季節を潜り抜けてきた戦  
痕がよく見て取れる。剥がれ落ちた漆喰の壁、大胆に割れ目の入った床板。高い  
天井を支えている一本の太い親柱。

玄関から上がったところに木製の長椅子とスタンド灰皿、達磨ストープが置  
いてあり簡単な休憩スペースが設けられている。

簡素な帳場があるがそこには誰も立っていない。

唯一、天井から吊り下げられている千羽鶴だけが、空間に色味を持たせている。

玄関の戸が薄いガラス板を震わせながら開く。

同時に野鳥たちの声が勢い良く流れ込んでくる。

男「ごめんください。」

一人の男が立っている。

黒いニットキャップに光沢のあるダウンジャケット、手には小さな風呂敷を持ち、もう片方の手でステレンス製のキャリーケースを引いている。

肩に三尺ほどの長細い牛革製の楽器用ハードケースを斜めに掛けている。

男「ごめんください。」

どこからも応答はない。

一歩玄関内に入る。

男「ごめんください。」

男は玄関から一度外に出て、

男「寒いので、中に入って、休みましょう。」

老人が姿をあらわす。

背丈は三尺ほど、小人症の老人である。

この老人もまた黒いニットキャップを被り、ツヤのいい革の外套を着ている。腰元まで白髪が伸びていて、一見男性か女性か見分けがつかない。

人形師・倉田百福とその息子の一郎である。

百福は長い山道を歩いてきて、少し息が乱れている。

口先を窄めて、息を整えている。

バス停から続く長い山道を歩いてきた。

一郎はもう一度奥に向かって、

一郎「ごめんください。」

やはり応答はない。

一郎「あがりましょう。あそこ、椅子に。」

百福「ふう、そうね。」

一郎は玄関の戸を閉める。

野鳥の声は小さくなり、柱時計の振り子の音が際立ってくる。

二人は靴を脱いだが、長居するつもりはなく靴棚には入れない。

百福は長椅子に腰掛け、丁寧に膝を摩る。

一郎は無人の帳場の方に歩みを進め、あたりを見て回る。

帳場の横に便所があり、軽くノックをしてから中を確かめる。

一郎「誰もいないようですね。待ちましょう。」

百福「うん、いいよ。」

一郎「便所ここですね。」

百福「ここなんていうところ？」

一郎「届いた手紙には、書いてありませんでした。」

百福「ああ、そう。」

一郎「看板も無いですね。こういう古い宿だと、たまに。」

百福「そうね。」

一郎は風呂敷の中から水筒を出し、父にお茶を出す。

百福「ああ、ありがとう。」

熱い日本茶を啜る。

百福「うむ。」

一郎はタツパーの蓋を開け差し出す。

百福「なにこれ？」

一郎「きな粉の団子です。」

この寒さでは糖分は必要だが、まだ口に入れるには早いとばかりに百福はそれには手を付けず、茶だけを続けて飲む。

柱時計の振り子の音がよく聞こえる。

一郎が団子を風呂敷に戻し、立ち上がるうとした時、

百福「いいよ、もう、声は。」

一郎「はい。」

百福「手紙、間違いはないのか？」

一郎「はい。もう一度、読んでみます。」

一郎は百福のそばに膝つき、封筒から紙を抜き、早口に読み上げる。

依頼状

拝啓、紅葉が風に薫る季節となりました。百福先生におかれましては、穏やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。さて、突然のお願いで、誠に恐縮ですが、この度・・・(少し読み飛ばす)・・・念願でありました先生の人形芝居を、最後に、この宿に見せていただけませんか？地図を同封させていただきました。何卒ご承引くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。平成二十五年十月三日吉日

奥からゆつくりと階段を降りてくる音が聞こえて来る。

一郎「誰か来ますね。」

百福「あ、そう。」

一郎「でも、お客のようです。」

百福は少し温くなったお茶を飲み干す。  
すぐさま一郎はコップにお茶を足す。

玉暖簾をくぐって、頭巾をかぶった老婆が現れる。

声「滝子というこの村の住人です。馴染みの者からは「お滝さん」と呼ばれています。彼女の住む集落はこの湯治宿から一里ほど離れたところにあります。八十を超えても煙草は止められず、十年前に夫を亡くしてからさらに量が増えました。子供の頃からよく来ているこの湯治宿、今は秋口から冬が訪れる直前までの間だけ毎年泊まりに来ています。胸の痛みが少し和らぐのです。」

お滝は浴衣の上に厚手の羽織を着て、手には風呂敷を持っている。風呂敷からは小さな鎌が飛び出している。近くに山菜を取りに行くところだ。

お滝は二人を見るなり驚き、立ち止まる。

一郎はまだお茶を注いでいる。

お滝はすぐさま警戒するような顔つきになる。

お茶を注ぎ終わり、

一郎「こんにちは。」

お滝「…こんにちは。」

一郎「倉田と言います。」

お滝「…はあ。」

一郎「我々は東京から呼ばれて、参りました。今晚、ここで余興をやることになつて居るのですが、」

お滝「ええ…」

一郎「宿の方はご不在ですかね？」

お滝「え？なに？ 余興？」

一郎「ええ。宿の方を探しているのですが。」

お滝「知らんちゃ。(滝子は富山弁を話す)」

一郎「そうですか、わかりました。」

お滝「ここちや、誰もおらんちゃ。」

一郎「え？どなたもいらっしやらない？」

お滝「なあん。ここ、宿の人ちやおらんちや。」

一郎「家主さんは？」

お滝「家主？おらんって、家主なて（なんて）、そんな人ちやおらんて」

一郎「そうですか。この近くの方ですか？」

お滝「は？何？わしけ？なあん、ちかない。（近くない）」

一郎「ここにはよく来られるのですか？」

お滝「そやね。」

一郎「そうですか。」

お滝「…あんたら病気け？」

一郎「え？」

お滝「病気治しに来たんけ？せやろ？（そうだろ？）」

一郎「我々は余興をしに来ただけです。この宿の方に頼まれて、」

お滝「だから宿のもん（もの）ちやおらんて、なんべんもなんべんも言わせて、

嘘つかれまよ、あんたら病気やわ。」

百福は立ち上がり、

百福「誰もいないんだって。」

お滝は百福の小ささに驚愕し、息を飲む。

一郎「あ、はい。」

百福「便所行ってくる。」

百福が便所に入ると、お滝はようやく呼吸を戻し、

お滝「な、何もんけ、あんたたち？」

一郎はポケットから、煙草を取り出し、火をつける。  
長く吸い込み、煙をゆっくりと吐き出す。



一郎「まあ、とにかく、わかりました。」

お滝「こ…ここちや、余興やるようなところじゃないちやよ。旅で来るもんもおらんし。村のもん以外で知つとるもんもおらんやろて。ずつと西下つたところ(ろ)の、山王はん(山王神社)の方にしな…つとした温泉町あつけど(あるけど)、そこなら、宴会やるような宿あつちや。そこ…間違えとんがないけ?」

一郎「わかりました。」

お滝「…ねえ、ちよ(ちよつと)、ちよいよ。」

一郎「はい。」

お滝「あの人ちや、なにけ?」

一郎「父ですが。」

お滝「え?」

一郎「私の父です。」

お滝「は?ええ?お…おつとさん?」

一郎「はい。」

お滝「さ、本当け?」

一郎「ええ。」

お滝「あんたの?」

一郎「はい。」

お滝「…ええ…嘘やろ…」

百福が便所から出てくる。

お滝「ナマンダブ(南無阿弥陀仏)な。ナマンダブな。ナマンダブなナマンダ

ブな…ナマンダブ、ナマンダブ。」

まだにわかには信じられない様子。

百福は宿の草履を履き、外に出る。

一郎が後を追おうとすると、制して、

百福「いい、ちよつと外見てくる。」

お滝はまだ熱心に念仏を唱えている。  
百福は散歩に出る。

お滝「はあ…」

お滝は少し落ち着きを取り戻して、

お滝「ほんで、なにけ？その余興ちゃ？」

一郎「人形芝居です。」

お滝「人形芝居？人形芝居…わからん、なにけそれ？」

一郎「そうですねえ、人形を動かして、お芝居をするというものですかね。簡単に言うとうと。」

お滝「よう、わからん。見たことないわ。それよか、あんたのおっとさん、もう年やろ、よお生きとられんねか（長生きしているね）いくつ？八十超えとるやろ？」

一郎「ええ。」

お滝「せやろ、わしと一緒やわ、かわいさげに（かわいそうに）こんなとこ連れてこられて。」

一郎「ええ、まあ、仕事ですから。」

お滝「もうバスないやろ？」

一郎「そうですか、もう一度調べてみます。」

お滝「なあん、もう泊まってかれま、そこ入った一階空いとるわ。」

一郎「ええ、バスが終わっていたら、そうするしかありません。」

お滝「なあん、終わつとるわ。いっちゃいっちゃ（良いよ良いよ）。松尾さんゆう、目見えん兄ちゃんおるわ。病気持ちばっかやわ。」

一郎「相部屋なんですね？」

お滝「なあん、他おらんから狭ないちゃ。」

お滝は玄関外を見て、

お滝「おっとさん、帰ってこんぜ？」

一郎「ええ。」

お滝「あんた名前ちや何やったつけ？わし聞いたつけ？」

一郎「倉田一郎と申します。」

お滝「一郎さん。おっとさんはなんちゅうがけ（何て言うの）？」

一郎「百福です。倉田百福。」

お滝「ももふく？さ、何け、変わった名前やねえ。どんな字書くがけ？」

一郎「漢数字の百に、幸福の福です。」

お滝「あらあ、おんもしろい名前やねえ。わしは滝子です。ありがとうございます。ほんで、あんたら少し休んだら、お湯にこられませな。（来てくださいませ。）」

一郎「バスが終わっていたら。」

お滝「まあ、荷物下ろしてこられ、そこ置いとかれても邪魔やわ。わし煙草吸

えんねかよ。」

一郎「そうですか。」

お滝「あつたかなって。（暖かくなって）」

一郎は礼をする。

お滝「はいどうも。」

一郎は玉暖簾をくぐり、客間へ行く。

一人残されたお滝、浴衣の袂から煙草を取り出すが、不意に湯上りの火照った体に冷気が入り込んだ気がして体を震わす。

煙草吸うのを止める。

声「あの二人の無心の佇まいがそうさせたのか。この寒さが人の温もりをもとめたか。あの一郎という男の夜光虫のような目がそうさせたのか。滝子はこの時、亡き夫のことを想っていました。この歳に至っては、意外なことでした。」

お滝は山菜採りを止めて客間へ戻る。

声「宿はその古びた躯体を震わせた。この名もない宿もまた、この二人の来客にこころ揺らしているようでした。」

暗転

声「地獄谷温泉『無明ノ宿』。本日はご来場ありがとうございます。どうぞ、ごゆつくり、最後まで、ひとつ、お澄ましくくださいませ。」

## 二場 客間

客間は二階建てで、一階（男部屋）二階（女部屋）ともに数人が同時に寝られる簡素な広間で、同じ構造である。

それぞれの部屋に小さなコタツが一つずつ、その上に、ポットと湯のみ茶碗、茶筒が置いてある。

二階には鏡台と衣紋掛があり、着物が二重掛かっている。壁には二本の三味線が立てかけられている。

窓から見える中庭には、大きな柿の木が立っていて、紅葉の時期を過ぎた葉と、今にも落つこちそうな完熟の実がなっている。厳しい冬の寒さを耐える硬質な樹皮が都会のものとは違って逞しく感じられる。

温泉に入るにはこの中庭を通って脱衣場に行く構造になっている。

一郎が襖を開けて一階の客間に入ってくる。

荷物を下ろしていると、百福が散歩から戻ってくる。

百福はキャリーケースを指差して、

百福「休ませてあげなさい。」

一郎「ええ、いますぐ。」

百福は窓際に座り、景色を眺める。

一郎は荷物の紐を解き、広げる。

一郎は一旦手を止め、押入れから数枚の座布団を取り出し、埃を払ってから、それらを重ねて百福のそばの床に置く。

一郎「どうぞ、寒くないですか？」  
百福「ん？うん。」

一郎はまたお茶を用意し、先ほどのきな粉団子と一緒に百福に出す。

百福「ありがとう。」

今度はひとつ団子を口に入れる。糖分で熱を起こす必要がある。

百福「で、バスはないのか？」

一郎「まだ分かかっていません。すみません。これ済ませたら、調べて来ます。」  
百福「うん。」

一郎は茶を注ぎ足す。

百福は部屋を見渡しながら、少し惚けた雰囲気を漂わせ、

百福「おい。あの時の、あの、逃げたさきの家どこだった？」

一郎「ええ。」

百福「ほれ、あそこもこんな風な。」

一郎「そうだったのですね。」

百福「ああ、なんていう名前だったっけなあ。」

百福は旅先で同じことをよく語る。

一郎は決まって同じように返答する。

一郎「雄山、ですか？」

百福「いや、違うな。お、大泉、違うなあ。」

一郎「そうですか。」

百福「良いところじゃないか。ここ。」

一郎「はい。」

百福「山がきれい。」

一郎「バス停まで行って時間見てきます。」

百福「よろしく。」

一郎は部屋を出ていく。

百福はお茶と団子を交互に楽しむ。

少し日が傾き、気温も下がる。遠くから猟銃の音が聞こえ、森が急な寒暖差に耐える声をあげる。

脱衣場の戸が開かれて、中庭にメガネをかけた男が現れる。

厚手のスウェットを着ているが、それでもこの男がいかにも痩せているかが分かる。髪の毛は剃毛処理されてあるが、剃りきれず部分的に残っているとこがある。

男は慎重な足取りで歩いている。

声「この男が松尾さん。滝子と同じくここから一里離れた村の住人です。事故で眼を悪くして、職を失ってからの湯治宿に頻繁に滞在するようになりました。村唯一の小さな診療所では手に負えなかったのです。絶望の中、それでも僅かにももの輪郭を感じるまで回復したのは、この湯治場のおかげだと信じています。彼にとってここは、光を取り戻す最後の望みなのです。」

松尾は中庭を通って客間に入ってくる。

湯から上がったばかりで、手ぬぐいを肩に掛けている。

畳の上に腰を下ろし、本を読み出す。

百福が長いあくびをする。

ようやく松尾は百福に気づいて、

松尾「ああ、これは…」

百福「こんにちは。」

松尾「…き、気づきませんで…」

百福「ええ。」

松尾「目が悪いものですから。」

百福「ええ。」

松尾「旅の方で？」

百福「え？まあそうね。」

松尾「こんなところに、珍しい。どちらからおいでで？」

百福「東京から、」

松尾「そうでしたか、それはお疲れでしょう。お一人ながですか？」

百福「息子とね。」

松尾「ああ、お子さんと、それはいい。」

百福「んん。」

松尾「お身体のことです？」

百福「え？お身体？」

松尾「ああ、いや温泉やったら下にありますから、わざわざここまで来られたんちゃ、その、ご病気か何かで？」

百福「いや。」

松尾「え？通りかかったがですか？」

百福「まあそんなところかね。」

松尾「あらあ、そうですか。ようこんなところ見つけられましたねえ。」

百福は煙草を取り出し一服する。

窓を少しだけ開けて煙を外に吐き出す。

松尾「喉ちや大切ですねえ。」

百福「え？喉はまあ：タバコ吸うからね。」

松尾「ああ、煙草ちやいけませんね。」

百福「そうね。」

松尾「ええ、こちや空気もいいですからね。ゆっくりなさって。じきに良くなりますよ。」

百福は煙草が不味くなったのか、数口だけ吸い、灰皿に揉み消す。

松尾は本の続きを読む。

松尾「可笑しいでしょう。」

百福「何が？」

松尾 「目見えんがに本を読んどんがちや。」

しばらく答えを待つが、百福は興味を示さず、何も答えない。

松尾 「前ちや点字読んどったがですけどね。せつかく目見えんがにわざわざ本を読むこともないわあ思いましたね。」

百福 「そう。」

松尾 「これちやねえ、(と得意げに百福に見せて) 押し花ながですよ。ここいらの山で集めましてね、それこうやって。」

百福 「へえ。」

松尾 「盲人になったら心眼が開く言いますでしょ、でも簡単なことでちやないみたいで、」

百福 「ふうん。」

松尾 「こうして生命に触れとると何かそのきっかけをつかめるような気がすんがですよ。それで。」

百福 「へえ、心眼ですか、」

松尾 「まあそう期待しとるだけです。でも…」

百福 「それでなにを見るの？」

松尾 「それで？」

百福 「だから心眼でしょ、それで何が見えるの？」

松尾 「それは…：こころ、でしょうか…」

百福 「あ、そう。それ見てどうするの？」

松尾 「…どうもしません。見てみただけです。」

百福 「あ、そう。」

松尾は居直して、

松尾 「申し遅れました。松尾と申します。失礼ながですけど、お名前ちや？」

百福 「倉田です。」

松尾 「倉田さん、ありがとうございます。」

百福 「どういたしまして、松尾さん。」



間

百福「触ってみますか？」

松尾「ん？」

松尾は何のことか理解できず、百福の言葉を反芻させている。その意味を求めて首から脳天がよく動く。

一郎が戻ってくる。

松尾は咄嗟に身を守る姿勢をとり、慌てた様子で周りを警戒する。

一郎は父に、宿のものは誰もいなかったこと、今日のバスはもう終わったことを伝える。

百福「そう。わかった。じゃあやっぱり帰れないの？」

一郎「そうですね。明日の朝六時半が次です。」

百福「そう、それでいいんじゃない。」

一郎「すいません。」

百福「箱ちょうだい。」

一郎はキャリーケースを取るのに踵を返したとき松尾に気づく。

一郎「ああ、これは失礼いたしました。」

松尾「…（自分に向けられていると思っていない）…」

一郎「これは、失礼いたしました。」

松尾「あ、わたし、ああ、はい…」

一郎は百福にキャリーケースを渡す。

百福はそれを開けて中のものを確認する。（詳細は見えない。）

一郎「松尾さんですね。我々は東京から来まして、」

松尾「ああ、ええ、先ほどお父様から、」

一郎「そうでしたか。」

松尾「いや、驚きました。」

一郎「どうかしましたか？」

松尾「いいえ。わたし目が弱いものですからね。」

一郎「それは、(と頭を下げる。)」

松尾「なあん、なあん。そうでちやなくて、その…人の気配ちや分かるものですが…」

百福「人の気配じゃなかったってこと？」

松尾「(狼狽えて)いいいえ。そういうことでちや、その、小さい子供ながかと、さつきお子さん言うところでしたでしょう。」

一郎「ああ。」

松尾は二人にお茶を出そうと茶筒と茶碗を探す。

しかし、手馴れていたはずがこの時はうまく見つからない。

一郎「お茶、結構です。」

松尾「あ、ああ、そうですか…。相部屋なのですが、どうぞ宜しくお願い致します。」

一郎「いいえ、我々の方こそ邪魔しまして。明日早朝に出ますので。」

松尾「そんな、折角いらしたがに、ゆっくりなさって。」

一郎「ええ、そうしたいところですが、実は我々肩透かしを食いましたね。」

松尾「と言いますと？」

一郎「この宿から連絡をいただいて、余興をやってくれと、」

松尾「余興？」

一郎「ええ、我々人形芝居をやるものでして、宴会なんかで、」

松尾「ああ、そうでしたか。おかしいと思っと思ったがですよ。いくら病氣いっても、こんなところ普通誰も来られんから。ああそうでしたか。」

一郎「ええ。」

松尾「てつきりお父様の養生かなんかでいらしたのだと。失礼しました。しかし、人形芝居ですか。めずらしいがですね。でもおかしいですね。こちらや見ての通り、ただの湯治宿でして、宴会なんかちや…ええ。どなたから連絡もらったがですか？」

一郎「それが、依頼の手紙が来まして、名前が無いのでわからないのですが…」

これです。」

一郎は手紙を差し出すが、当然ながら松尾は見ることができない。

松尾「…いや…ははは…。」

一郎「ああ、すいません。」

松尾「いいんですよ。しかし変ですね。ここちや宿主ちやおらんがですよ。」

一郎「ええ、先ほど女の方に。」

松尾「ああ、お滝さん。滝子さん、お婆ちゃんの。」

一郎「玄関に帳場がありましたね。」

松尾「ええ、昔ちや家主さんおられたんやわ。この辺の村にもたくさんおつて、良く流行つとつたみたいですちや。もう人おらんようになって、家主死んでからちや、自由に解放して、利用者各々で気付けて使つとるといったところですかね。まあ利用者ゆうてもも馴染みのもんしかおらんけど。」

一郎「そうでしたか、」

松尾「本に載るような所でちやありませんからね。」

一郎「ええ。」

松尾「ああ、三助さんが知つとるかもしれんなあ。」

一郎「三助さん？」

松尾「ええ、流しの、珍しいがですよ。一人おられてねえ。でも、彼も宿のもんでちやなくて、ですね。私も詳しくわからんですが、お滝さんの次に古いから。」

一郎「そうですか。」

松尾「後で聞いてみましょう。」

一郎「はい。」

松尾「お急ぎながですか？」

一郎「いいえ。」

松尾「他に何かお困りの事ちやありますか？」

一郎「ええ。」

百福は既にキャリーケースを閉じて、座布団の上で寝ている。

一郎は父親を案じて、

一郎「炊事場は？」

松尾「炊事場？そうでした、そうでした。困りましたね。ここ無いがですよ。」

一郎「いえ、明日の朝までなので、おそらく必要ありませんが、一応。」

松尾「そうですね。ここで長く泊まる人ちや私以外おられませんからね。私ちや、ほとんど食べませんが、」

一郎「ええ。」

松尾「三四日に一度。山行って山菜とって、温泉で茹でて、それだけでおいしいものですよ。」

一郎「へえ、温泉で、山菜を？」

松尾「ここ長く滞在しとるがちや、私とその三助さんくらいで、雨の日なんか足元悪いと彼が採ってきてくれましたね。」

一郎「それは厳しい生活ですね。私には耐えられそうにないな。」

松尾「都会でちや何でも食べられがでしょう？（食えることができるのですよ  
う）」

一郎「ああ、ええ。」

松尾「金あったらいつペン（一度）行ってみたいもんやなあ。」

一郎「ええ。」

松尾「ずっと東京ながですか？生まれたがも。」

百福は寝ている。

一郎「ええ。そうです。」

松尾「…あ、そうですか。」

脱衣場の戸が開き三助が現れる。

三助はこの寒い中、素肌に布製の腹巻、半股引という姿で、頭に手ぬぐいを巻いている。松尾と対照的に身体は大きく、肌は深黒い、でっふりとした腹でヒグマのような印象である。肩から腕にかけて大胆に菩薩の刺青が彫られていて、ベゼルにダイヤがあしらわれた金の腕時計をしている。

手にはタオルが二つ、それを外に干しに出たところだった。

松尾はその物音に反応して、

松尾「ああ、ほら三助さんでしょう。」

一郎「白い股引の、」

松尾「ちよっとお待ちを。手紙お借りできますか？」

一郎は無言で松尾に手紙を手渡す。

松尾「(驚いて) おおっ…」

一郎「お願い致します。」

松尾「なら、行ってきます。」

松尾は客間から出て、中庭に行き三助と話す。

一郎は部屋の中で立ったまま二人を待つ。

声「三助とは、漢数字の三に助けるという字を書きます。銭湯や湯治場で湯の管理や番頭仕事、垢すり、髪すきなどの「流し」を行う人のことを言います。職業としては古く、江戸時代ではなかなかの高給取りでした。最近是需要が減って雇う湯屋も少なくなりました。この三助は無口で働きの、でも無口が過ぎて、誰も声を聞いた事がありません。だから皆は名前を知らず「三助さん」と呼んでいるのです。」

松尾は三助と話し終わり、部屋に戻ってくる。

松尾「なあん、分からんがみたいやわあ。これ、お返ししますね。」

松尾は手紙を返す。

一郎「ありがとうございます。」

三助が部屋に入ってくる。

松尾「三助さんです。」

一郎「今晚泊めていただくことになりました、倉田と言います。お世話になります。」

三助は寝ている百福を見て、寝具を準備し出す。

一郎「ああ、大丈夫です。」

三助は構わず行動する。

二階でお滝が起きる。

お滝は横になっていただけで寝入ってはいなかった。

窓辺に腰掛け、物思いにふける。

階下の親子のことが気になっている。

一郎「お伝えしていただいたみたいで、大変助かります。」

松尾「お力になれず。」

一郎「そんな、ええ、ありがとうございます。」

松尾「無口なかたでして、まあ無口ちゆうか：（声を潜めて）口がきけんで、ははは、」

一郎「いえ、それは、」

三助は百福を持ち上げ、丁寧に布団に寝かせる。

一郎「あつ、私が、」

しかし三助は手を止めることをしない。

一郎は三助から目を離さず。

松尾「何かありましたか？」

一郎「…いいえ…」

松尾「あら、お父様、寝られたがですか？ああ、寝とられとったがが、」

一郎は三助をじっと見たまま、松尾の質問には答えない。  
三助は百福を寝かせ、一郎の分の布団を用意しようとする。

一郎「私は、自分で。」

三助は手を止め部屋を出る。

松尾「何か変なことでも？」

一郎「いいえ。」

松尾の首から脳天がよく動き出す。

一郎はようやくニットキャップとダウンジャケットを脱ぐ。  
それを丁寧に折りたたみ、床に置く。

松尾はジッパーを下げる音に反応して、

松尾「窓を開けていただけでも構いませんよ。」

一郎「いえ、暑くは、」

松尾「寒いですか？」

一郎「いや、寒くも無いです。」

一郎はポケットから煙草とライターを取り出し、折りたたんだダウンジャケットの上に置く。

松尾はその音を聞いて、

松尾「ああ、煙草やったら、気になさらないで。確かこの辺りに灰皿が…」

一郎「はい。」

一郎は畳の上に座る。

しばらくして立ち上がると、すかさず松尾は、

松尾「座布団でしたら、」

一郎「お手洗いです。」

松尾「帳場の奥、突き当り左です。」

一郎「ありがとうございます。」

一郎は部屋を出ていく。

百福の寝息がよく聞こえる。

松尾はぐっすり寝ている百福の近くに寄る。

熟睡していることを認識して、布団越しに身体に触れてみる。

異様に身体の小さな人間であることが分かる。

脱衣場から女たちの声が聞こえて驚き、慌てて手を引っ込めコタツに戻る。

その拍子に湯飲み茶碗を倒してしまう。

松尾は強く動揺している。

脱衣場から浴衣姿の女が二人現れる。

化粧のない肌が、熱に働かされ桜色に染まっている。

声「この湯治宿から東に二里下ったところに鄙びた温泉街があります。この二

人、文枝といくはその温泉街の芸妓さんです。」

文枝も富山弁を話す。お客さんの手前標準語に努めてはいるが、ところどころ発音が違う。いくは年齢が若いいため方言は薄い。

二人は階段を登り、襖を開けて二階の部屋へ入る。

いく「(寝ているお滝に気づいて)うわっ、びっくりした。」

文枝「え？あら、お滝さん？山菜取りに行ったんじゃないの？」

お滝「ああ、止めたわ。」

文枝「あら、」

一階では松尾が百福と一郎の荷物を調べだす。  
その手が震えて仕方がない。



お滝 「ふみ、ふみ、ふみよ、」

文枝 「ん？」

お滝 「変な親子おったやろ、下に。」

文枝 「親子？会ってないわ。お客さんで？珍しいわね。こんなところに、」

お滝 「親子ゆうても、私とあんたくらい親子やぜ、東京から来たがんと。」

いく 「ええ？東京から？」

文枝 「東京？」

お滝 「余興しに来たがやと、人形芝居やって、」

文枝 「人形芝居？あら、どちらの宿で？いく、知ってる？」

いく 「知らないです。」

お滝 「どこにって、ここによ。」

いく 「え？」

文枝 「ここに？」

お滝 「そうなんよ。あのひとら、そう言うとったわ。わしもびっくりして。」

文枝といくは顔を見合せて笑う。

文枝 「何言ってるんよ。お茶飲む？」

いく 「何言ってるんですか。」

お滝 「なにけ、あんたら、わし呆けたおもとんやないけ、本当やちゃ。」

文枝 「だって、ここ、宴会やるようなところじゃないわ。(いくにお茶をすすめ)

あんたは？」

いく 「あ、すいません。いただきませす。」

お滝 「なら下行って聞いてみられまよ。」

本気の口調に押されて、文枝といくはまた顔を見合う。

茶を入れる手を止めて、

文枝 「本当？」

いく 「うそお。」

文枝 「誰かに頼まれたのかしら？」

いく「ええ？そんなこと、」

お滝「そうや、手紙持ったぜ。」

文枝「え？」

お滝「そや、地図も持った。」

いく「何の？ここの？」

お滝「そや。」

文枝「嘘でしょ。」

お滝「本当やって！」

文枝「なんか怖いわ…。」

いく「ねえ…。(しばらく考えて)あつ、三助さん？」

文枝「まさか、そんな訳ないでしょ。しゃべれないんだから。」

いく「そっか。字も書けないし、」

文枝「そうよ。間違い、間違い、きつと何かの間違いよ。夜はどっかでお座敷に穴が空いているわ。」

お滝は急に声を沈ませて、

お滝「ほいで、ほいで、そのおとさんの方がね…あのくらいなんよ。」  
いく「え？」

壁に立てかけてある三味線を指差して、

お滝「三味線よお、あのくらいなんよ。」

いく「なにがですか？」

お滝「背がよ、」

文枝「え？…」

いく「は？身長が？小さいの？」

お滝「せや。」

文枝「…それはだから…まあ…そういう方もいるわ。」

いく「は？」

お滝「おらんやろ、わしみたことないぜえ。」

文枝「あるんじゃない。そういう…。生まれつきの。」

一郎がトイレットペーパーを巻き取る音が聞こえる。  
松尾は物色する手を一旦止めるが、また続ける。  
一郎のダウンジャケットを発見し、袖を通してみる。

お滝「ほんで、その息子っちゅうががね。」

文枝「なに、まだあるの？」

いく「小さいの？」

お滝「なあん、背は普通。普通なんやけど…その子見とると、胸んとこなんか  
サワサワつとすんがやちや、」

文枝「なに…なによ、サワサワって。」

お滝「…なあん、いいわ、いいわ、」

文枝「なによ。」

お滝「なあん、寝るわ、寝るわ。」

お滝は布団を深くかぶる。

いく「なに？ざわざわするってこと？」

トイレの洗浄音が微かに聞こえる。

松尾は風呂敷の中の何かに触れる。

松尾「ん？オムツ？」

混乱で首から脳天がよく動く。

文枝「はい、もういいわ。お滝さん、私たち稽古させてもらいますわよ。」

お滝「…。」

いく「いいかしら下のひと、」

文枝「いいわよ。ねえ？」

お滝「知らんちゃよ。あんたら聞いてこられまよ。」

文枝「いいわ。そういうところなの、ここは。」

いく「ねえさん、頼もしいわ。」

お滝「わしのせいにせんといてや。」

文枝「しないわよ。はい、いくちゃん。」

いく「はい。」

文枝といくは三味線を持ち、調弦をする。

声「母と娘ほど離れている文枝といく。子供のいない文枝はいくを娘のように可愛がり、いくもまた文枝の短い節太の指に、離れて暮らす母を思わずにはいられないのです。」

滝子は布団から顔を出し、文枝といくを静かに見つめる。

声「何も変わらない、いつもの景色だった。でも、今日は何かが違って見える。

滝子はそう思うとまた胸がサワサワとするのでした。」

二人は調弦を終えて、

文枝「じゃあ、昨日やったところからいってみましょう。」  
いく「はい。」

三味線の稽古が始まる。

一郎が部屋に戻ってくる。

松尾は慌ててコタツに入り、

松尾「お、お茶…飲まれますか？」

一郎「え？結構です。」

一郎は父のはだけた布団を直し、窓辺に座り外を眺める。

煙草を取り出し、一服吸い出す。

その姿が父とよく似ている。

窓を一寸開けると、三味線の音が聞こえて来る。  
松尾は上ずった調子で、

松尾「いいもんでしよう。」

一郎「いいものですね。」

松尾「芸妓さんたちですね。」

一郎「そうですね。」

松尾「よくおられますよ。普段ちや温泉街の方にある寮に住み込んで。でもここ、まわりを気にせんで稽古できますから。」

一郎「なるほど。」

松尾「大酒飲みでねえ、男たちも勝てません。」

一郎「そうですね。」

松尾「明るくて、優しい人たちですねえ。ええ…」

しばらくの間、松尾は居心地悪さを感じている。

一郎「まるで家族ですね。」

松尾「え、家族？ははは、そうですね。でも、冬の間ちや雪酷くて、ここ使えませんから、また散り散りになります。あつたかなって雪少ななればまた顔合わせますが、前の事ちやなかったようによそよそしく始まりますね。ははは…。」

松尾は言葉が長くなる。

一郎「でも、またそれも解けて。」

松尾「ははは…ええ、雪のように。おっしゃる通りで。」

一郎「ええ。」

松尾の首から脳天がよく動く。

松尾「息子さんにちや…いつもお父様が…。」

一郎「(松尾を見て) ええ。」

松尾「その気配を感じながら）い、いらっしやる…」  
一郎「ええ。」

三味線の稽古が終わる。

文枝「はいここまでね。」

いく「ありがとうございます。あ、お滝さん寝てる。」

文枝「あら。」

二人は三味線を片付ける。

いくは窓際に行き、稽古で硬くなった背中を叩き伸ばしながら、外に目をやり、

いく「あ、頂きのほうはもうすっかり雪被って、冬ですね。」

文枝「あらそう？ちよつと早いかしら。」

いく「ええつと…ああ、ダメだ出てこない。本当に…。わたしろくに山の名前も覚えてない。」

文枝「ああ、あれ？奉天山よ、ホウテンザン。ホウテンヤマ…？いいわよ、そんなの知らなくて。」

いく「だってもうわたし、ここきて何年？」

文枝「年は数えないの。はい。（お茶を出す）」

いく「あつ、すみません」

二人は熱い緑茶を飲む。

文枝「あそこに白い仮設のが建っているでしょ。工事が始まるのよ。来年の夏、

ここ線路が敷かれるんだって。」

いく「それやっぱり本当なんですか？私も聞いて、」

お滝は半身起して、

お滝「ええ？そりゃほんまけ？」

文枝「あら、姉さん起きてたの？」

お滝「ほんまけよ。」

文枝「ええ、お客さんに土建屋の偉い方がいてね、教えてくれたんですよ。ここ新しく新幹線が通るみたい。下の温泉街は大丈夫みたいだけど。」

お滝「ほんで？ここは？どうなんがけ？」

文枝「詳しくは分からないわ。」

いく「無くなっちゃうのかな…」

文枝「どうだろう。でも、そうだったら、ここが一番に取り壊されるわ。」

いく「…持ち主いないですもんね。」

お滝「さみしいねえ。わしゃここで死にたかったわ。」

文枝「なに、ちよつとやめてよ。」

いく「ここ便利だったのにね。お湯入って、稽古して、お座敷行って、酔ったから勝手に泊まれるのなもの。お客さんと会うこともないし。」

文枝「そうね。」

お滝「弱ったねえ…」

いく「…せめてもう一年…」

お滝「なにけ、せめてもう一年ちゃ？」

いく「それは、だって、もうすぐ冬になるし…」

文枝「ここがなくなると、三助さんもいなくなるでしょ、いくは来年で三十九になるのよ。」

いく「…。」

お滝「ああ、そんなことけ。」

文枝「大きなことよ。」

お滝「いく、あんた旦那はいよ（はどうしているのよ）？」

いく「ああ、孝三さん？いまは北海道に出張中。でももうすぐ帰ってくるわ。もちろん応援してくれて。彼のためにもね。四十は過ぎたくないんですよ。」

お滝「そか、頑張られや。ああ寂しなるねえ。」

文枝「そうね。大丈夫、大丈夫。」

滝子といくは会話をそつと閉じ、文枝はその間でももの思う。

松尾「私一本もらえますか？」

一郎「ああ、煙草？」

松尾「いいですか？」

一郎「もちろん。」

一郎は松尾の指の間に煙草を差し込む。

松尾「すみません、火、つけてもらっていいですか？」

一郎はライターで火をつける。

松尾は慣れておらず、すぐに噎せ混む。

一郎「大丈夫ですか？」

松尾「…ええ…」

夕日が濃さを増す。柿の橙色が手伝い部屋を一層赤々とさせている。

文枝はそっと立ち上がり、中庭の見える窓際に立ち、

文枝「見て。」

滝子といくは文枝の方を見る。

文枝「熟れて美味しそう。」

お滝「ん？ああ、柿け？」

文枝「なんだか夕日がいつもより赤いわと思って、これだったのね。食べごろね。」

お滝「そうかい？少し茶色いわな。あっこまでいったらもうだめやろ。」

文枝「いまくらいが一番美味しいのよ。」

お滝「なら食ってみられまよ。」

文枝「後で食べるわよ、うるさい。さあ、いくちゃん、支度して、お迎え来ちやう。」

お滝「あれ、あんたらもう行くが？」



文枝「今日は早いよ。いくちゃん？」  
いく「…はい。すぐに。」

お滝「あんたら忙しいがけ？」

文枝「忙しくないわよ。今日だってこの時間のは珍しいわ。線路が通れば忙しくなるのかしら。」

お滝「線路通ったらあんたらの仕事無くなるやろ、若い子らに仕事とられて、」

文枝「（お滝を遮るように）お滝さん？」

お滝「なにけ？」

文枝「そんなこと、知らないわよ。」

お滝は文枝の強い調子に逃げるように大あくびをしてみせる。

お滝「わしゃ、一寝入りして、また、お湯入っかね。ああ、残念やね、ナマン  
ダブナマンダブ。」

文枝「ちゃんと寝てよ。滝さん上がる頃にはきつと戻ってるわ。」

文枝といくは鏡台の前で化粧をし始める。

文枝はいくの化粧を手直しする。

お滝はしばらく外を眺めてから寝る。

松尾「湯殿にご案内しましょうか？」

一郎「ええ、そうですね。」

松尾「お父様ちや、起こさんでよろしいがですか？」

一郎「ああ。ええ。」

松尾「わたしはね、お二人の身体を見たいがですよ。見てみたいちゅうが  
も、おかしいがですが…。」

一郎「ええ、なぜ？」

松尾「ここ男の人おらんから、珍してね。」

一郎「そうでしたか。」

松尾「珍しい機会なんですちや…それに、」

一郎「ええ。」

松尾「先ほどあんたに驚いたんちや子供と思とったからでちや、ええ、それだ

「けでちやない気が……しますもんで、」

一郎「そんな、見せるものでは、さきにどうぞ、もう一服付けてから、」

松尾「待ちますよ。」

一郎は新しい煙草に火を点ける。

松尾「お父様、よく寝とられますね。」

二階では、

文枝「あつ、お滝さん、何か持ってくる？」

お滝「菜っ葉の漬けもんかなんか持ってきて、そこ置いといて。」

文枝「はいよ。」

百福が目を覚まし、部屋を出て行く。

松尾はそれに気づかないほど興奮している様子。

舞台静かに回転。

夕日が六人の顔を照らしていく。

### 三場 脱衣場（夕方）

湯気を逃す通気口から、夕日が差し込んでいる。

脱衣場はそれだけで十分な明るさを保っている。

壁掛けの扇風機が回っているが、古さと湿度と過労でカタカタと音を立てている。古い体重計に木の長椅子、脱衣籠が並べられた木の棚がある。

浴槽に注がれる湯の音が奥の湯殿から漏れ聞こえてくる。

三助が脱衣場を熱心に掃除している。

目につくところの隅々を綺麗にしている。

脱衣場の戸が開かれ、百福が入ってくる。

三助は身体を強張らせ直立不動となる。

百福「おお、おまえ三助か。珍しいな。」

三助は餌を貪り食うネズミのように嬉しそうに顔を縦に振る。

百福が服を脱ぐと、裸の小さな老体が露わになる。

三助はそれに魅了され、石化したようになる。

百福「おい。」

床に置かれた竹箆の中に小銭を投げ入れる。

三助は深々と頭を下げる。

百福「先、(湯に) 浸かる。」

百福は湯殿へ続く戸を開け、立ちこめる湯煙の中に消えていく。

湯殿の方から百福が掛け湯をする音が聞こえる。

桶を扱う軽快な音がそれに続く。

三助はガラスにへばりついて湯殿の百福を覗き見る。

すると、三助の鼻からとろりと液体が垂れ落ちる。

その液体を指で拭う。

鼻血が出ている。

何度もすすり上げ、戻そうと努めるが、どうにも止まらない。

持っていたちり紙を力任せに鼻腔に詰める。

遠くの方からお寺の鐘の音がかすかに耳に届く。

三助は金の腕時計に目をやる。

時刻は午後五時を回ろうとしていた。

三助は股間に異変を感じる。

陰茎が強く怒張し、激しく脈動している。

三助は自分の反応に驚き、それを必死に抑えようと、息を吹きかけたり、叩いてみたりする。

戸が開かれて、一郎と松尾が現れる。

三助は慌てて立ち上がるようにするが、上手く直立できない。

松尾「ここで、服を脱ぎます。」

一郎「ありがとうございます。」

松尾「手ぬぐいちやお持ちでないでしょう。三助さん持つとりますよ。」

一郎は手に持った自分の手ぬぐいを置くと服を脱ぎ始める。

松尾は時が止まったかのように、それを見つめている。

一郎は財布から二万円を抜き、竹箒の中に置く。

三助は目を丸くして驚く。

一郎「お先に。」

松尾「あ：はい。」

松尾は急いで脱衣する。

大根を摩り下ろせそうなほどに肋骨が浮かび、両脚は何年も漂流してきた流木のようにやせ細っている。全身の体毛はなく、血の気もないが、肌の白さは眩しさを感じるほど艶やかである。

三助は、脱衣を終えて湯殿へ行こうとする松尾を制止して、外し忘れたメガネを取ってあげる。

松尾「…体震えとるわ。ちょっと待ってもらえるけ？」

松尾はしばらく長椅子に座りこむ。

三助は松尾の頭を優しく撫でる。

声「盲目の松尾が見つめようとするもの。その先には何があるのでしよう。」

松尾「ありがとう、さあ、入らんまいけ。(入ろうか)」

三助は松尾の手を引いて湯殿へ移動する。

声「さあ、ご一緒に湯殿へまいりましょう。」

舞台回転

#### 四場 湯殿(夕方〜夜)

露天の岩風呂。

浴槽の縁となる部分の岩には幾つものロウソクが無造作に立てられている。

溶けたロウが固まり、それを土台に次のロウソクが立てられる。その作業が長年繰り返され、まるで鐘乳石のような形状に変化している。

そのうちの二、三本に火が灯っている。

防湿のためにビニール袋に包まれた大きなマッチ箱と新しいろうそくが浴槽の端に置かれている。

明かりが足りなければ火をつけるが、今はまだ夕日が保ってくれている。

絶えず沸き続ける源泉の音が、この山の奥底の威力、迫力ある脈動を感じさせる。

百福と一郎はすでに湯船に浸かっている。

湯温が高く、二人とも額に大粒の汗が浮いて、顔は真っ赤になっている。

三助と松尾が湯殿に入ってくる。

松尾「(三助に) もう大丈夫。」

松尾は浴槽の岩肌を触り伝い歩く。慣れた手つきで桶を持って掛け湯を二回してから浴槽に入る。松尾はその間も湯煙の向こうの一郎から注意を背けることはない。

百福は湯船からあがる。

百福「(三助に向かつて) おい。」

松尾は驚き、

松尾「あ…お父様…いらっしゃったのですね…。」

三助は脱衣場から駆け足で湯殿に戻ってくる。

丁寧な手つきで百福の背中を流す。

次いで肩を揉み、それが終わると鼈甲の櫛を使い、百福の長い白髪を梳かす。それが終わると髪を結び上げていく。

百福「うまいもんだね。ありがとう。」

三助は顔を真っ赤にし満面の笑みを浮かべ、何度もこうべを垂れる。

百福「いいよ。」

一郎「はい。」

一郎は浴槽から上がると、松尾が敏感に一郎の動きに反応する。

一郎「お願いします。」

三助は一郎の背中を流す。

背をほぐし始めた三助の太い腕がブルブルと震えだす。

百福「めくらはやっぱり、若く見えますな。幾分、他よりも。ねえ?」

松尾「え? 私にちや分かりません。」

百福「自分で触ってみたらどう? わかるんだろ、その自慢の指先で。ほれ、ほれ。」

松尾「…面白い方ですね…」

百福「なんだお前、花ばっかりか。」

松尾「あなたは? 倉田さん、どんな?」

百福「なに？」

松尾「どんな、身体を…」

百福「むごいものだよ。触ってみるか？」

百福は松尾の頬をそっと撫でる。

松尾は跳ねるように驚き、

松尾「…いえ、失礼をするつもりぢや…」

百福「そりゃ残念だ。」

三助は一郎の身体の異常な堅さに顔を真っ赤にさせながら指圧している。

松尾「息子さんは…」

百福「一郎？もつとむごいよ。」

松尾「…そうですか。」

百福は微笑む。

松尾「わかりませんな。」

百福「まあ、そう、気を張りなさんな。」

三助が一郎の身体を流し終わり脱衣場に戻る。

一郎が浴槽に戻ってくる。

松尾は急に身体を硬直させ、その気配を強く感じようと努める。

しばらく沈黙が流れ、湯の音だけが湯殿を包む。

百福は浴槽の縁に両手を乗せて、寝てしまう。

寝息がかすかに松尾の耳に入る。

松尾は波を立てないよう静かに一郎に近づく。

松尾「お疲れでしたね。」

一郎「寝られましたか。」

松尾「私がしゃべり過ぎました。でもご安心を、ここの湯ちや、柔らかいですから。」

一郎「ええ、そうですね。」

松尾「めくらの言うことで、失礼をお許しいただきたいのですが…お父様ちや、変わった方ですねえ。話しとつて分かります。面白いつちゅうことです

よ。その…」

一郎「そうですね。」

松尾「すみません。」

一郎「いえ。」

松尾は額の汗をぬぐい、

松尾「見てみたいものです。人形芝居。」

一郎「ああ、出番がなさそうですね。」

松尾「もちろん私にちや見ることでできませんが。」

一郎「ええ」

松尾「どんな人形ながですか？」

一郎「どんな？」

松尾「その、形といますか、何の人形ながですか？」

一郎「人形は、昔父が作ったもので、」

松尾「腹話術みたいがですか？」

一郎「いいえ。」

松尾「そうですね。もしよかったら、あとで触らせてもらえませんか？」

一郎「それは、出来ません。」

松尾「え？」

一郎「触ることは出来ません。私も。」

松尾「…そうでしたか…すみません。」

声「松尾はこの時、一郎の心がどこまでも深く、常夜の底にあるように見えたのです。その暗闇が満腹の蛇の腹のように膨らんで波打ち、迫ってくるように見えたのです。その暗闇はどこから来るのか、どれほどの深さか、松



尾は盲目になって初めて大きな欲望が湧いたのです。この目で見たい。見たい。見たい。」

松尾「一郎さん…」

百福「目をつむったまま」松尾さん。」

松尾「え？は…はい、」

百福「あなたの探しているその、こころっていうのはね。ないですよ。どこにも。私にも、あなたにも。」

湧き出る湯が一寸勢いを増した。

松尾「あ、暑いですね…」

松尾は逃げるように浴槽から這い出るが、すぐにその場に倒れこんでしまう。痩せ細った身体からは呼吸の乱れがよく分かる。

薄いガラス板を強く震わせながら戸が開かれ、お滝が湯殿に入ってくる。髪は簡単に結び上げられ、幾分、若く見える。

お滝「お邪魔しますよ。あら、こんなところでなにけ、あんた大丈夫け？」

松尾「…お先に。」

喉から絞り出すように告げて松尾は湯殿を出る。

お滝「なにけ。変なひとやねえ。」

お滝は二度たつぷりの湯で掛け湯をし、浴槽に浸かる。

お滝「あら、なんか変なお湯ねえ、」

百福と一郎を交互に見ながら、落ち着かない様子で胸に溜まった違和感を鼻から放出する。

お滝「ふん…」

お滝はすぐに浴槽から上がり、

お滝「はい、来てえー。」

三助が湯殿に入ってくる。

お滝「あんた、たのんちゃ（頼むわ）」

三助はお滝の背中を流すが一郎の背中を指圧した時の力加減が残っていて、

お滝「痛い！痛い！強いつて、あんたさ、なにけ！」

お滝は三助の頭を叩く。

お滝「たくさん（お金）あげたんやから、ちゃんとやられまよ。」

三助は力を抑え、いつものように背中を流す。

お滝「せやせや（そうそう）、せやせや。あんたさ、あの娘ら、今日座敷からあがってくんが、早いがやと、」

三助の顔を見て、

お滝「いくのことやせ、今晚、たのんますぜ？おい、おい。」

と三助の股間を握る。

お滝「いいわ、終わり、終わり。髪いっちゃ。髪（髪の毛）は結わなくていいわ（）」

三助は脱衣場に戻り、お滝はまた浴槽に入る。

お滝「ふうう、ありがたや、ありがたや。」

百福は目を覚まし、

百福「お先に。」

お滝「どうぞ、」

百福は脱衣場へ、一郎も次いで上がろうとすると、

お滝「おっとさん。疲れとんがないけ？」

一郎「ああ、ええ、どうでしょう。」

お滝「ここ、良い湯やろ？」

一郎「そうですね。」

お滝「こんなん東京にちゃ無いやろ？」

一郎「無いですね。」

お滝「おって（留まって）よかったやろ。」

一郎「ええ。」

お滝「せやろ。」

得意顔のお滝。

一郎は上がろうとするが、構わず、

お滝「あんた、おっかさんは？わしぐらいやろ？」

一郎「いません。」

お滝「なに？死んだん？」

一郎「ええ、わたしを産んですぐに。」

お滝「すぐに？あらあ、そうけ、かわいさげに。あんた結婚は？」

一郎「いいえ。」

お滝「一度もけ？」

一郎「ええ。」

お滝「好きな人ちやおらんのけ？」

一郎「いません。」

お滝「ありやま、よわったぜ（困ったね）。中学でおったやろ、初恋の、ほれ。」

一郎「学校には、行っていません。」

お滝「ええ？中学、行つたらんが？」

一郎「はい。」

お滝「小学校は？」

一郎「行ってません。」

お滝「：何しとったん？」

一郎「父の手伝いを。」

お滝「人形のけ？」

一郎「ええ。」

お滝「ずっと？」

一郎「はい。」

お滝「あんた：なんで？」

一郎「父がそう決めたんです。では、お先に、失礼。」

一郎は湯殿を出る。

お滝「ナマンダブ、ナマンダブ、ナマンダブ…」

声「陽はもうすっかり落ちていました。」

舞台回転

五場 客間（夜）

午後六時を回ったあたりだが、既に外は真っ暗。

脱衣場の扉を照らす傘のついた白熱灯だけが暗闇を照らしている。

湯上りの百福が中庭で柿の木を見上げている。

一階の部屋には松尾がいるが、部屋の電気はついていない。

百福が部屋に戻る。

百福「なんだ、暗いなあ。」

百福はコタツの上に乗垂れる紐を引っ張り、電気を点ける。  
松尾に驚き。

百福「うわっ、なんだいたのか。」

松尾「ちよつと散歩へ……」

百福「え？夜道は危ないんじゃないの？」

松尾「気をつけます。」

百福「気をつけるって……やめといたら？」

松尾は部屋を出て行く。

百福は一人窓際に座り煙草を吸う。

どこか寂しげに見える。

一郎が部屋へ戻って来る。

一郎「すみません、遅くなりました。」

百福「なんかある？」

一郎「おにぎりしかありません。すみません。」

と荷物の中からおにぎりを出す。

百福「あと、茶と。」

一郎「はい。」

百福「おかしいもんだね。」

一郎「ええ。」

百福「そんなに風変わりかね。」

一郎「いいえ、そう思いたいのでしょう。」

百福「まあ、俺は圧倒的に惨めに見えるからな。」

一郎「父さんがそう思いたければ、」

百福「うん、そう思いたい。」

乱暴に玄関の窓が開けられる音、と同時に文枝といくの騒がしい声が響く。仕事を終えて文枝といくが戻ってきた。

二人とも酒に酔っていて、特に文枝は深く酔っている。

先の客を口汚く罵ったり、板場の手伝いをされそうになったところを抜け出せたことを喜んだりしている。

百福「ほれ、獣がいらっしやった。」

一郎の表情が硬くなる。

百福「静と動で、わかるか。」

一郎「ええ、捕食されて、」

百福「怖いか？怖いだろ。おまえを食いに来たんだ。」

一郎「…」

百福「女は恐ろしいぞ。」

文枝といくは二階の客間に行く途中壁にぶつかったり、階段を踏み外したりとうるさかったが、急に足音が静かになる。

百福「静かに。ほら、来るぞ。」

しばらくして一階の客間の戸が開かれる。

文枝に押されていくがまず顔をのぞかせる。

いく「あっ！あ…こんばんは…」

文枝「こんばんは。」

いく「こんばんは。」

文枝「ウソ…これが親子？」

いく「しい！」

百福が煙草を取り出す。

いく「はっ！動いた！動いた動いた！」

文枝「あれ、人形？」

いく「違いますよ。あの人がやるんですよ。」

文枝「人形の人？」

いく「人形の人って、なにそれ、あの人が人形みたいでしょ。」

文枝「やばい混乱してきた。」

いく「なんで？」

文枝「人形を動かす人形がいるってこと？」

いく「やめて、聞こえるから！」

文枝「閉めて、一回閉めて！」

戸を一度閉める。

百福はそつと煙草を戻す。

いく「きちんとしよう。」

文枝「うんわかった。もう、わかった。」

再度開ける、文枝といくは芸妓らしく顔を作って、

文枝「こんばんは。文枝です。」

いく「いくです。私たち下の温泉宿で芸妓やっております。」

と、担いでいた三味線を見せる。

文枝は振り真似をしてみせて、

文枝「ベンベン！」

いく「うるさい。」

一郎「こんばんは、東京からきまして、今日一晩お邪魔させてもらうことになりました。倉田です。」

文枝「良いんですよ。倉田さん、ごゆっくり。」

いく「姉さんのものじゃないでしょ！」

文枝といくは盛大に笑う。

文枝「私たちもう、今日は終わったんです。」

いく「終わったんです。倉田さん、お酒召し上がりませんか？」

いくは風呂敷から一升瓶を出して。

いく「お座敷から持ってきた。」

文枝「あゝ悪い子。」

いく「姉さんが良いって言ったんでしょ！」

また二人は盛大に笑う。

一郎は表情を変えることなく座っている。

いく「えっと、飲みましょ！」

文枝「飲もう飲もう！」

お滝が脱衣場から出てくる。

文枝「あ、お滝さん！お滝さんだあ。」

お滝「おお、もう帰ってきたんけ？」

文枝「そう。一緒にどう？」

お滝「ああ、いっちゃ。(遠慮しとくわ)」

文枝「あ、残念。年寄りも放っておいて我々だけで楽しませよう！」

お滝「はがやつしや(腹立つわ)」

お滝は二階へ上がっていく。文枝、その足音を聞き、

文枝「うっせえ、ばばあ！」



文枝だけが盛大に笑う。

二階に上がったお滝は、タオルを干し、熱を冷ますため窓辺に腰掛ける。

灰皿を片手に煙草を吸う。

窓を開けると一階から騒がしい声が聞こえて来る。

お滝「チツ、やかましや（うるさいわ）ドラブチ（馬鹿たれ）が、」

一階では、文枝といくが日本酒を振る舞う。

コタツの上の湯飲み茶碗になみなみと注ぐ。

文枝は百福に向かって、

文枝「そちらの先生は？」

一郎「いいんだ。酒は飲まなれないんだ。」

いく「あら、残念ですわ、（一郎に）はい。」

文枝「ようこそいらっしやいました。」

一郎「一杯だけ。」

一郎は唇を濡らす程度に留める。

いくと文枝は一気に飲み干す。

文枝「はあ、美味しい。」

コップに付いた口紅をそっと拭う。

いく「（文枝に）はい、もう一杯！」

いくは一郎の表情を気にしながら、

いく「東京っていいわ、理想の国みたい。行ってみたいわ。」

文枝「理想の国の人ね。石畳があつて、煉瓦造りの建物がダーつと並んでいて

さあ、」

いく「そうそう！」

文枝「みんな外で食事するのよ。」

いく「外で?!」

文枝「知らないの? そうなのよ。外に机出して、座って、」

いく「ワイン飲みながらね!」

文枝「米みたいなダサいの食べないのよ、イモよ、イモイモ。イモめちやくちやに潰したやつあいつら食ってんのよ。ねえ?」

いく「ああ、いいわあワイン。こんな臭い日本酒なんか飲まないのよ。」

文枝「あっそうだ、これこれ、」

菜っ葉の漬物を出す。

いく「それ、お滝さんにじゃない?」

文枝「いいのよ、どうせ食べないんだから、(一郎に差し出して) はい。」

一郎「結構です。」

文枝「いいのよ、遠慮しないでえ。」

いく「美味しいんですよお。」

文枝は一掴み食べる。

いく「食べたいい。あゝん。」

二人は音を立てて食べる。

ゆっくり飲み込んでから、

文枝「お兄さんたち、人形芝居やるんですって?」

一郎「…ええ。」

いく「すごい!」

文枝「どんなの? 浄瑠璃みたいなの? 昔テレビでやっていた三国志の人形のみ  
たいなの? あ、あれだ、わかった。」

いく「どんなのですか?」

一郎「いえ、そういうものでは、」

文枝「ええ、じゃあどんなの?」

一郎「そうですね…。」

百福は煙草を吸いだす。

文枝は一郎の返事を待たず。

文枝「見たいなあ。」

いく「見たい、見たい、見たい。」

一郎「いえ今日は…。」

文枝「お願い、お兄さん。」

と文枝は一郎に擦り寄る。

小ぶりながら頑丈で張りのある乳房を一郎の腕に押し当てて。

一郎「いえ、それは、」

文枝「お願い。」

一郎「そういわれましても、」

文枝といくは目を合わせて、

文枝「じゃあ、私たちが最初にやるから、その次、ね？」

いく「最初にやって、その次ね？」

文枝「よっしゃ、何やる？」

いく「姉さんの好きなので良いよ。」

文枝「なんでも良いか。酔ってて、もう何でも一緒！」

二人は三味線を取り出し、

いく「ええ、なに、もう、ええ…じゃあこれ？とか？」

文枝「越後獅子？暗いわ。もっとパアツとしたやつ！」

いく「わかった！これはどう？」

演奏が始まる。

息の合った演奏。ふたりは激しく弦を叩き、小さな湯治宿を震わせた。荒々しい三味線の音色。

女の野生の意力。

文枝の胸元は大きくはだけ、豊かな胸の谷間が露わになる。

いくの着物の裾もまた徐々にはだけていき、白い太ももが露わになる。生白い肉が湯水の如く盛り上がった足だ。

二階のお滝はまた吐き捨てるように、

お滝「やかまつしや、」

お滝は二人を止めに行こうとするが、足を止める。

普段使わない鏡台の前にそっと座り、くわえ煙草のまま、髪をほどき櫛で梳かし出す。

声「若き頃、お滝は三味線を習っていたが程なくして止めた。芸妓にならなかつたのは戦渦の影響もあったが、なにより自分で容姿の良し悪しくらい見分けがついたからだ。お滝は彼女たちを羨ましくもあり、応援している、家族のように振る舞いたいと思っている。だからいつもは聞いていないふりをして過ごしていた。しかし、いま下から聞こえてくる彼女たちの音色は、お滝の女そのものの真芯を掴んでいた。嫉妬が目覚めたのだ。あのととき夢見た芸妓の姿、客との恋、豊かな乳房を見てくる土木作業員など、思い出と幻想が入り混じり、浮かんでは三味線の強い調子に蹴られ、綺麗に消えたりしていた。」

お滝は鏡台をそっと閉じ、一階に降りる。

部屋に入って文枝といくを睨みつける。

しかし、すぐには止めない。

止めたくはないのだ。

演奏が終わり、

お滝 「下手くそ！」

文枝 「あら、お滝さん、いらっしやい！」

お滝 「いらっしやいじゃないちや。うるさて、眠れんねか。」

文枝 「来たかったんでしょ？」

お滝 「なにをっ！いじくらしや」

いく 「いいじゃない。」

お滝 「いいわけないやろ！ここ座敷と違うがんぜ。そんなベンベンベンで  
っかい音で！」

文枝 「知つとるわよ。」

お滝 「あんたらのもん（もの）じゃないがやぞ。」

文枝 「わかっつとるって、なに怒つとんのよ。」

お滝 「ふみ！あんた、いい加減にしられよ。」

文枝 「もうやめたわよ。終わった、終わった。」

お滝は文枝といくのはだけた着物を直す。

お滝 「あんたら人様の前で、ちゃんと、しられや！」

文枝 「ちよつと（着物が）縊れんねか！」

いく 「お滝さん、今から倉田さんたちの人形芝居が始まるのよ。」

お滝 「ええ？」

文枝 「楽しみ、楽しみ。」

お滝 「いいっちゃ。この人ら疲れとんがやから。寝られまよ。」

いく 「お滝さんも見えていこうよ。」

お滝 「何言うとんがんけ！あんたら、もう立たれまよ。二階上がられまっ！」

お滝は文枝といくの手を握り、連れ出そうとする。

ふと、百福が立ち上がり、

百福 「おい。」

一郎 「え？」

百福 「ちよつとだけ。」

一郎 「はい。」

文枝「え？本当？」

いく「素敵、お兄さん最高！」

文枝「きゃーうれしい！やったあ！」

一郎は百福の前にキャリーケースを置く。

そのあと黒い牛革製のハードケースを開けて楽器を取り出す。

いく「なにあの楽器？見たことないわ。」

文枝「はっ、胡弓……」

いく「こきゅう？」

突然三助が部屋に入ってくる。

いく「ああ、三助さん。」

三助は急いでコタツの上の湯のみやポットを片付け、天板をひっくり返し麻雀マットの面に変える。

持っていた手ぬぐいで天板を綺麗にすると、また急いで部屋を出て行く。

文枝「三助さん？え？」

いく「なに？なんだったの？」

お滝「しいっ！始まる。」

一郎は目を閉じ、演奏を始める。

それは聞いたこともない音色だった。

富山県富山市八尾町に三百年続く「越中おわら風の盆」というお祭りがある。前夜祭合わせて二週間、人々は寡黙に踊り続ける。昼夜問わず、町で誰かが踊っている。その踊りに合わせる楽器の一つが胡弓である。胡弓が紡ぎ出す音は、影の強い八尾の町角と相まって哀調を帯び、同時にこの世とあの世の境界線を振動させるような魔的な魅力がある。

一郎の胡弓に合わせて、百福はキャリーケースを開け人形を取り出す。

人形は顔の大きさに比較して体は小さく細い、両腕は細いが、手の五指は全て大きく長い。特に親指が長い。裸の人形、大きな陰茎がダラリと垂れている。カナダの脳外科医ペンフィールドが示したもので、大脳皮質運動野と体性感覚野と身体部位との対応関係を強調させて出来上がる人間のモデル「ホムンクルス」である。

百福はその人形を抱きかかえ、コタツの上に乗る。

人形はまるで親に甘える子のように動き、百福から離れようとしなない。

百福もまた人形を優しく見つめ、優しい声で語りかけている。

百福「いい子だ、そう、そうだよ。お前の好きに動けばいいんだよ。さあ、いつもの通りに動けばいいんだよ。恥ずかしがらず、やってみなさい。」

胡弓の音色が変わり伸びらかに転調する。

百福は人形とともにダンスを踊る。

百福「そうだ、その調子。」

徐々に人形が生き生きと動き出し、

百福「上手だ！いいぞ。」

最早一人前のように人形は踊っている。

雪が降ってくる。

誰もそれ気づかない。

百福は無心で人形と踊る。

周りはそれをただ呆然と見つめている。

一郎の目が開く。

胡弓の音色は激しく荒々しくなり、徐々に音楽性を失っていく。

演奏が終わる。

百福はそつと人形を座らせ、礼をさせる。

お滝、文枝、いくも慌てて礼をする。

一郎も両手を畳につけて深々と礼をし、胡弓を片付ける。

沈黙が流れる。

文枝「ああ…うん…。」

いく「うん…。」

文枝「ああ、そうね…ええつと。」

いく「すてき…だった…。」

文枝「そう、そうね。あ、ありがとうございます。」

いく「ありがとうございます。」

一郎「こちらこそ素敵な三味線をありがとうございました。」

文枝「いいえ、そんな…。」

百福は人形に優しく話しかけながら、キャリアケースに戻る。

百福「はい、今日も良くできましたね。明日は朝早いからね。もう寝ましょう

ね。朝一番のバスで東京戻りますからね。」

お滝、文枝、いくの三人はその様をしばらく見つめている。

何を見たのか、何が起こったのか、見当がつかない様子。

百福は布団に入り、眠りにつく。

中庭で三助が立っている。

雪が髪と肩に積もっている。



いく「あたし、酔っ払っちゃった…みたい…」

文枝「ええ。私も。戻ろうかな。」

いく「そうですね。」

文枝「おやすみなさい。」

いく「おやすみなさいませ。」

お滝「なんだいあんたたち…。」

いくが戸を開けると、憔悴した松尾が立っている。

いく「わっ！びっくり…松尾さん、いたの？」

松尾「（反応せずに）…。」

文枝といくの二人は階段を駆け上がり、急いで着物を脱ぎ、衣紋掛に投げかける。

白い長襦袢のまま布団に入る。

二人の間に会話は無い。

お滝「ありがとう。えらい良かったちゃ。おやすみ。風邪引かんとゆっくり休

まれ、ありがとう。」

一郎「お滝さん、ありがとうございました。」

お滝は部屋を出る。

二階に上がり、二人が消せなかった電灯を落とす、

お滝「おやすみ。」

自分も布団に入る。

寝ながら、片腕を上げて、指を動かしてみせる。人形芝居を真似たかった訳ではなく、ただ、生きていることを確認したかった。生命に触れたいと思った。

いくは布団から手を伸ばし、コタツの上のスマートフォンを手にし、出張中の夫に電話をかける。

しかし応答がないのでEメールを送る。

文枝は布団に包まったまま動かない。

三助はまだ外に立っている。

大粒の涙を流し、嗚咽を漏らしている。

一郎は窓を開けて、

一郎「あの、終わりました。もう、大丈夫です。風邪ひきますよ。」

三助は動かない。

一郎「あの、」

松尾が部屋に入ってくる。中庭の方を向いて、

松尾「三助さん？」

一郎「ほら、三助さん、もう…」

三助は動こうとしない。

一郎はピシヤリと窓を閉めて、

一郎「戻りました。」

三助はまだ中庭から動こうとしない。

涙は止まらない。

松尾「三助さん…あんたけ…」

一郎「戻りましたよ。」

松尾「いや…。」

一郎「(遮って) 松尾さん、いいじゃないですか。」

松尾「…。」

一郎「私ももう休みます。」

松尾「え…ええ、そうですね。」

一郎「いいですか？電気。」

松尾「お構いなく。消してください。」

一郎「わかりました。」

松尾「私にはどちらも変わりないですから。」

一郎は電気を消す。

松尾も電気を消そうとするが、紐を探すのに手間取る。

一郎は松尾の腕を掴む。

松尾「ひいっ！」

一郎は松尾に紐を掴ませる。

松尾「…つけることないから…慣れとらんで…」

宿は真っ暗になる。

脱衣場にある小さな白熱灯だけが光り、牡丹雪を照らしている。

三助は深々と頭を下げ、脱衣場へ戻る。

松尾は立ったまま、震える手でメガネを外す。

眼球があつたはずの場所に二つポツカリと穴が空いている。

松尾「ずいぶん昔のことで、今ちやもう誰もそうは呼びませんが…」

一郎「ええ。」

松尾「かつて、ここちや『無明ノ宿』と言われとったそうです。」

一郎「ええ。」

松尾「仏教の十二縁起の無明です。ご存知ですか？」

一郎「いいえ。」

松尾「十二縁起とは人間が苦しみを感じる十二の原因のことです。その最初が無明、つまり『迷い』のことです。」

一郎「はあ。」

松尾「無明から始まり、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死。

これらが繋がって互いに関係し合っています。人間はあらゆることに迷い苦しむ。この営みこそが人生の本体ではないでしょうか。そしてこれらの関係を真に理解することが彼ら仏教徒の求める『悟り』なのです。」

一郎「そうですか。」

松尾「面白いものです。仏教においては愛もまた苦しみを生む原因なのですか。」

一郎「ええ。」

松尾「すみません。盲人ちゃおしゃべりなもんやから…ねえ一郎さん。」

一郎「はい。」

松尾「あなたに『迷い』はありますか？」

一郎「ええ、そりゃ誰でも。」

松尾「愛するものは？」

一郎「松尾さん。」

松尾「差し支えなければ、」

一郎は父の寝姿を見たまま、静かに、しかし強い調子で、

一郎「もう、いいだろ。」

三助が風呂場と脱衣場を掃除する音が聞こえる。デッキブラシの音が漏れ聞こえてくる。

いくはスマートフォンを落とし布団から起き上がる。足音を殺しながら、部屋を出る。しかし冷えきった宿の躯体は、いくの火照った体が通過する度に大きく音を立てる。「お願い、静かにして」と祈りながら階段を下りていく。

中庭に着く。

白い長襦袢のまま、雪で髪を濡らさないように手ぬぐいを一枚頭に広げている。

脱衣場の戸をノックするが応答がない。

寒い、もう一度ノックするが三助に届いていない。

ふと地面に目を落とすと、完熟の柿の実が一つ地面に転がっている。

それを拾い上げ、かぶった雪を払ってあげる。

橙色の完熟の実がいくの手のひらの上で輝く。

脱衣場の戸がゆっくり開き、三助が顔を出す。

いく「三助さん、背中流してくださいさる？」

三助は頷き、招き入れる。

竹箒に硬貨を入れる音が聞こえる。

お滝「ふみ、起きとんがやる？」

文枝「なあん、寝られんわ。」

お滝「わしもや、」

文枝「あの人形芝居…、わたし怖かったわ。途中目伏せとったわ、見られんかった。分かる？」

お滝「ええ？」

文枝「あの、人形怖かったわ。」

お滝「…変わった、都会のもんやろ、よう分からんかったけど、おっとさんよ  
う（よく）動いて、がんばとったちゃ。」

文枝「あれは、子供よ。あのひとの、大きくならない、永遠の子供なんよ。」

お滝「何言うとんがけ、知らんちゃよ。」

文枝「ほら、私子供産めんかったでしよ。」

お滝「ええ？どうしたんけ？」

文枝「ねえ？」

お滝「…ほんで？」

文枝「ちがう、だから…わからん…。」

お滝「…。」

文枝「なにか、なにか、無くなる気がするんよ。」

お滝「…寝るぜえよ。」

文枝「胸がさわさわするって…そうでしよ？」

お滝「やかましや。あんたと、あのひとら（ひとたち）とちや違うちや。」

文枝「違うわよ、そんなことじゃないちゃよ！」

お滝「あんた、変やわ。わしなんも考えんかったぜ。」

文枝「あの子見てた。」

お滝「え？」

文枝「あの子、いくはじつと見とった…。」

お滝は大きくため息をつく。

文枝「いくちゃん、今度こそ上手くいくといいわ。三助さん、がんばって！」

お滝「ふみ…」

文枝「今度は必ず成功するわ。私の分も。なに？」

お滝「…なんでもないちゃ…。」

お滝は布団から出て、羽織を着る。

文枝「どうしたの？お滝さん？」

お滝「煙草吸いに行つてつくつちゃ。」

文枝「もう止めたら、体に毒でしょ。」

お滝「あんた、上手なっちゃ、いい音やった。いくも本当上手なっただねえ。」

来年から聞けんようになったら寂しなっちゃ。」

お滝は部屋を出る。

文枝「なによ…。」

お滝が階段を下りていく音。

文枝「やめてよ。」

文枝は起き上がり、お滝を追う。

脱衣場からいくの喘ぎ声が聞こえ始める。

松尾「一郎さん？」

一郎「…。」

松尾は一郎が寝入ったと思い、キャリーケースの場所を探しだす。暗闇の中静かに這うように動き、ようやく見つける。

一郎は寝ていない。

松尾をじっと見ている。

松尾はキャリーケースを開け、中に入っていた人形を持ち上げる。

顔、手、体、足、松尾の手に触れるすべてが異様な人形。

盲目の人間にとって触覚だけで頭に描くホムンクルスは恐ろしい化け物のよう、松尾は硬直してしまふ。

松尾「う…ああ…。」

声が漏れそうになり、慌てて口を手で塞ごうとした時、人形の口元の仕掛けが外れ、長い舌がべロリと出る。

その大きな舌が松尾の顔の上に乗る。

松尾「うわぁ！」

慌てて部屋を飛び出し、中庭を抜けて脱衣場へ、

いく「わっ！松尾さん！びっくりした。」

松尾は構わず脱衣場に入る。（戸を開けたまま、湯殿へ行く。）

いく「もお、閉めてってよ！」

客間には一郎と百福だけになる。

一郎は窓辺に座り煙草に火をつける。

一寸窓を開けると、様々な声や音が一郎の耳に飛び込んでくる。

脱衣場の方からいくの喘ぎ声、玄関の方から文枝のすすり泣く声、湯殿の方からは松尾の苦しみ悶える声が聞こえてくる。

それらが混じり合い、この小さな湯治宿を揺らす。  
いや、宿が震えているのか。

一郎は煙草をもみ消し、窓を閉め、部屋を出る。  
中庭に出て、空を見上げる。  
雪は勢いを増している。

脱衣場へ入る。

\*ここから舞台はゆっくり回転し続ける。

脱衣場で三助といくが抱き合っている。

いくが三助に覆いかぶさって、首筋に何度も口付けをしている。

いくは夢中になっていて、一郎に気づかない。

一郎はしばらく眺めてから、湯殿に移動する。

湯殿のロウソクは全て灯っている。

松尾は源泉の湧き口に口を付けて必死に飲んでいる。

一郎はしばらく眺めて湯殿の外に出る。

玄関ではお滝が煙草を吸っている。

その隣で文枝は立ったまま啜り泣いている。

一郎はしばらく眺めて客間に戻る。

百福は人形を抱いて寝ている。

一郎は百福のそばに座る。

(舞台は引き続き回転する)

脱衣場でいくが三助に跨り激しく腰を動かしている。

やがて大きな痙攣とともにふたりは果てる。

湯殿で松尾はまだ湯を飲み続けている。

瘦せた腹に大量のお湯が入って、妊婦のように膨らんでいる。

玄関では文枝がお滝の胸で泣いている。

両手でお滝の浴衣をしっかりと握り、子供のように泣き続けている。

(玄関を正面に舞台の回転が止まる)



一郎がくわえ煙草で玄關に現れ、便所へ急ぐ。  
左手はすでにチャックを下げようとしている。

お滝 「あんた…」

一郎 「はい？」

お滝 「あんた…真っ暗やわ。」

一郎は便所に入る。

すぐに放尿の音が続く。

声 「小人症の父を持った為、人生の選択などなかった。ただそれだけのことだった。一郎は勢いなくだらだらと流れ出る尿を見つめながら『ああ、年をとったものだ…』とだけ、そっと思いました。放尿が終わりに近づき、天井に視線を上げると、夏に捕まった蛾の死骸が、クモの巣の端に引っかかって、隙間風に揺られていました。」

東の空が白けてくる。

声 「そして、次の日、朝早く。」

舞台静かに回転。

(脱衣場と湯殿が同時に見える位置で停止)

#### 六場 脱衣場と湯殿 (早朝)

早朝六時、脱衣場と浴場内に白銀の陽の光が差し込んでいる。

この日はとくに気温が低く、空気も澄んでいる。

このような日は、森の中から聴こえてくる目覚めたばかりの野鳥の声や、湯殿の音も美しく、互いに邪魔されずに飛び交う。

三助といくは脱衣場で寄り添って寝ている。

しばらくして二人は目を覚まし、いくは湯を浴びに、三助は普段の仕事に戻る。

いくが湯殿の戸を開けると冷気が流れ込んでくる。

いく「はっ、寒いっ！」

湯殿では松尾が岩風呂の縁に腰かけ、力なく項垂れるように壁に寄り掛かっている。

いく「あれ？松尾さん？おはよう。え…ずっといたの？」

松尾は応答しない、動きもしない。

いく「どうしたの？大丈夫？」

文枝が脱衣場に現れる。

文枝「(三助に) おはよう。」

脱衣して湯殿に移動する。

いく「あ、姉さん。おはよう。」

文枝「おはよう。」

いく「昨日すぐ寝たでしょ？」

文枝「あ、うん。そう…。」

お滝が湯殿に現れる。

いく「(欠伸をしながら) おはよう。」

文枝「…(小さな声で) おはよ。」

お滝「おはようさん。」

お滝はいつもの通り二度丁寧に掛け湯をして浴槽に入る。

三人の女性が朝日に照らされ入浴している。

白い肌と三様に垂れた乳房は滑りのある湯と絡み合い、鮮やかな人間味を放っている。

文枝は昨夜のことを思い出し、お滝と距離を取ってしまう。

いくは空で三味線を弾きながら、

いく「ねえさん、このあとってさ、」

文枝「…」

いく「ねえさん？」

文枝「え？なに？」

いく「なによ、ぼおーっとして。」

文枝「ごめん。なに？」

いく「だから、この後、続き教えて欲しいんですけど。」

文枝「ああ、そこはこうじゃない？あれ？スクイだったかしら、ハジキだった

かしら、忘れちゃった。」

いく「そっかあ、」

お滝「ハジキに決まっとるやろ。」

いく「え？」

お滝「ハジキや。」

いく「本当？」

文枝「お滝さん、さすがね。」

お滝「そんなもん誰でも知っとるわ。」

文枝「じゃあ、その後もいくちゃんに教えてあげて？」

お滝「あ？」

いく「やった。お滝さん、ここなんだけど、」

お滝「こうや、こう。違うて、こうや。」

いく「チン、チリ、チリチリ、トテ…」

お滝「ふみ、この先忘れたわ。」

文枝「ふふふ、うん。」

文枝はお滝のそばに移動する。

三人はお互いを補いながら口三味線を繋いでいく。

声「ほうれ…ほれ…ほれ…ほれ…ほれ…ほれ…ほれ…ほれ…ほれ…ほれ…」

突然湯殿の戸が開かれ、

百福「おはようございま〜す！」

百福と一郎が服を着たまま荷物を持って湯殿に入ってくる。

百福は人形を抱えている。

百福「はい、おはようございま〜す！」

声「ほれ、ほれ、ほれ…」

百福「おい、掛け湯。」

一郎は近くにあった桶を拾い、人形に掛け湯をする。

声「ほうれ、ほれほれ、ほうれ、ほれほれ。」

百福「はい。良くできました。じゃあ、お風呂入りましょうねえ。」

人形を大事そうに抱き上げ、優しく丁寧に入浴させる。

百福「あちちかな？大丈夫かな？」

赤子を沐浴させているかのように優しく。

お滝、文枝、いくは状況が把握出来ないでいる。

声「ふふふ、ほれほれほれ、うひひひ、ほれ、ほれ、うひひひ、ほうれ…」

一郎が笑っている。

澄んだ空気の中を真直ぐに走ってきた陽の光線が一郎の後頭部を照らし、日蝕のようになり、表情の詳細は分からないが、確かに一郎は笑っている。

声「ただ一人、松尾の夜は終わっていなかった。」

松尾は一郎のその表情を見て凍りつく。

松尾は嘔吐し、大量の吐瀉物がドシヤリと湯殿の床に落ちる。

何度も嘔吐を繰り返す。

昨夜身を清めるために飲んだお湯が全て吐き出される。

声「そして松尾はこのあと、宿を去っていきました。」

暗転

\*以下の老婆の声は暗転の中で語られる。

声「百福と一郎もまた、次の依頼先へと旅立って行きました。国中が気狂い、

血に飢え出したいま、百福の容姿と人形芝居はとくに求められました。人々

はいま惨めさを求めているのです。圧倒的な惨めさを！」

しばらくの静寂。

声「しかし、この宿で過ごした時間はいつものそれとは違いました。下山道中

一度、百福と一郎は目を交わし微笑み合いました。宿を出る時渡された金

の腕時計と高額報酬を思い出して、ではありません。それは確かに父と

子の何気ない微笑みでした。」

湯の音が聞こえて来る。

声「それから数日後、突然天の裂け目から降ってきたように本格的な冬が訪れ

ました。この集落のあたりは例年七、八尺の雪が積もるため、客が訪れる

ことはなく、村の人たちも冬ごもりをします。人出の足りない湯治場はこの時期一斉に閉鎖されます。この宿も同じく。」

湯の音が徐々にか細くなっていく。

声「ただ湯だけが、絶えることなく湧き続け、静かに雪解けを待っているのです。でも、この年はとくに、さみしそうに聞こえました。そして、震えているようでした。新幹線の線路を通す重機の咆哮が近づいてくるようで、怖いのです。」

湯の音はか細く、悲しく響く。

それに次いで重機の暴力的な音が大きく激しく迫ってくる。

湯の音はかき消されてしまう。

静寂

しばらくして蝉の鳴き声が聞こえてくる。

声「あれから十(とう)の月が過ぎ、夏が訪れました。木々が肉厚の葉を存分に広げ、盛んな自然力の量感を見せていました。その下ではセミたちが一斉に生命を競い出していました。そして、いま、あの地獄谷の名もない名のない湯治宿は、と言いますと…」

七場 客間(夏、昼間)

明転

中庭の柿の木は深い緑の葉を豊かに掲げている。

朝顔が色鮮やかに幹の周りを取り巻いている。

真夏の昼間の日光が満遍なく火の粉を振りまくように、全てを照らし出している。

赤ん坊の鳴く声がする。

二階でいくが目を覚まし、赤ん坊を抱きかかえる。

片方の乳房を出し、授乳させる。

大きな浅黒い乳首に赤ん坊が吸い付く。

声「いつでも、あなたのおこしをお待ちしています。」

新幹線の通過音が遠くに響く。

一塵の風が風鈴を揺らした。

その音に驚いた一匹の蝉が飛び立ち、羽音が遠ざかっていった。

暗転

了